



後輩に見送られて土浦海軍航空隊を後にし、飛行練習生として各地の練習航空隊に向かう予科練卒業生。『海軍航空隊ものがたり』より転載

霞ヶ浦（その14）～予科練を巣立って～

厳しい教育を修了した予科練生は、卒業式で教官や後輩に祝福され、「帽ふれ」の見送りを受けて正門を後にしました。卒業生は飛行練習生(飛練)教程に進み、約9ヶ月間(後に6ヶ月)練習機での操縦訓練を受け、更に各地の練習航空隊で実用機の訓練を受けた後に、戦地に飛び立っていきました。

飛行練習生

予科練生の教育期間は、各期で変更が多く、昭和18年5月時点の法規上の期間は乙飛2年6ヶ月、甲飛1年6ヶ月でした。適性検査の結果により、操縦専修・偵察専修に分けられ、それぞれの課程を終えて予科練を卒業すると、甲・乙・丙各種が合流して本科である飛行練習生(飛練)教程での訓練を受けました。

操縦専修生は陸上機専攻・水上機専攻に分かれて横須賀、霞ヶ浦の練習航空隊(昭和14年以降は筑波海軍航空隊・谷田部海軍航空隊等の各地の練習航空隊)で訓練を受けました。練習航空隊では飛行訓練とともに、学科や整備訓練も行われました。偵察専修は横須賀海軍航空隊(昭和14年以降は鈴鹿海軍航空隊)で、学科とともに「白菊」などの練習機で航法、通信、射撃、写真撮影等の実習を受けました。

飛行練習生教程では、搭乗員として必要な知識及び技能を習得させ、単独で飛行機を操縦できるようにする教育が施されました。その日課では「飛行作業」と呼ばれる飛行訓練が主体となりましたが、約9ヶ月(後に6ヶ月)で卒業となるため、「鬼の筑波、地獄の谷田部」と言われたように、予科練よりいっそう厳しい訓練が行われていました。しかし練習生たちは「いよいよ飛行機に乗れる、大空を飛べる」との希望に胸を躍らせていました。

予科練では、1個班が25～26名で編成され、それに下士官の班長が一人配置されていました。飛練の1個班は練習生10名で、班長と班付の教員が1名ず

つ配置されていました。教員1名が練習生5名(この飛行機単位の組み合わせをペアと呼んでいました)を受け持つ飛行訓練を実施するため、教員には実戦部隊から年の近い予科練出身者が多く配属されていました。入隊式後、貸与された飛行服・飛行帽・飛行靴それにライフジャケット一式を着込んだ練習生たちは外見だけはもう一人前のパイロット、飛練での日課が始まります。

飛行練習生は朝5時の総員起(こし)、朝礼、清掃の後、6時から朝食、朝食には鶏卵がつき、ミルクも毎日配食されました。いわゆる航空食で、予科練時代とは比較にならない待遇であり、これで搭乗員になったことを実感したといえます。朝食が終わると、食卓番(食事当番)だけが後片づけに残り、他の者は格納庫へ走り、教員の指導によって、格納庫から飛行機を出して、エプロンに並べます。「飛行始め」までに飛行準備を完了しなければなりません。7時30分から飛行始め、昼食を挟んで15時30分の飛行止めまで、各ペアごとに訓練が実施され、1回の飛行時間は1人当たり20分ほど、練習生たちは交代で大空へ飛び立っていきました。

飛行訓練は、93式中間練習機(初心者に乗っている練習機であることを周知させるために、最も目立つイエロー・オレンジ色に塗られていたので「赤トンボ」の愛称で呼ばれていました)等の教育用の練習機を使用して実施されました。最初は地上教育、機体の点検手順、エンジンの始動から試運転、更に地上滑走の要領など、実際に飛行機を使ってそれらの技能を習得します。いろいろな数

値を手帳にメモし、その日習ったことは、その日のうちに頭に入れるのが鉄則でした。



教官の前に駆け足で走り寄り、敬礼しながら、「〇〇練習生、定所着陸に出発しまーす」と大きな声で報告する飛行練習生。(「老兵の繰り言」HPより転載)

次に、飛行場を中心にして作られている「パノラマ模型」を囲んで、飛行場周辺の地形や著名な目標(霞ヶ浦・筑波・谷田部航空隊ならば筑波山・霞ヶ浦など)の方位と距離などを頭に覚え込んだ後、待望の飛行訓練が始まります。

飛行訓練は、教員が後席に同乗した「離着陸飛行」から始まります。これは飛行場の周辺上空を回りながら、離陸と着陸を繰り返して練習する、最も初歩的な飛行訓練です。しかも海軍の飛行機は航空母艦の狭い飛行甲板に着艦しなければならぬため、日ごろから飛行甲板に

着艦することを想定した着陸を行っており、最も短かい滑走距離で停止する着陸技術が求められていました。「離着陸の同乗飛行」に合格すると、「単独飛行」が許可されます。後席には重心を保つため教員の代わりに砂袋が積み込まれます。もう後ろから怒鳴られる心配はありません。練習生は「自分だけで飛行機の操縦ができるのだ。念願の天空を自分の腕一本で飛べるのだ」とワクワクしながら操縦桿を握っていました。しかし訓練は一段と厳しくなり、宙返りなどの「特殊飛行」や「編隊飛行」、「定所着陸(航空母艦の飛行甲板を想定した広さの区画に着陸させる訓練)」、「計器飛行」へと進んでいきました。

飛行訓練終了後15時45分からは別科主に運動の時間でしたが、多くはその日の飛行訓練での注意点を割られました。しかも口頭での注意だけではなく、腕立て伏せなどの罰直(それも総員罰直)が日課の一部ようになっていきました。16時45分から夕食。夕食後、酒保が開き、18時30分の温習始めまでが唯一息が抜ける時間でした。温習の後、21時に就寝。こうした日課が卒業飛行まで変わることなく続けられていきました。

実用機教程

海軍の飛行機には、その使用目的によっていろいろな種類がありました。まず陸上機と水上機に分けられ、陸上機の中で航空母艦でも使用できるものを、艦上機と呼んでいました。艦上戦闘機(艦載・艦上爆撃機(艦爆)・艦上攻撃機(艦攻))と呼ばれる機種でした。爆撃機と攻撃機の違いは、急降下爆撃ができるかど

うかで決められていました。急降下(降下角度45度以上)爆撃が可能な機種を爆撃機と呼び、それ以外は攻撃機と呼ばれました。攻撃機は水平爆撃と魚雷攻撃(雷撃)を展開しました。また双発の飛行機を中型、四発を大型と呼んで区分しており、中型攻撃機(中攻)と大型飛行艇(大艇)がありました。

飛行練習生教程が修了すると、操縦専修生は、適性に応じて戦闘機、艦上爆撃機、艦上攻撃機、陸上攻撃機、偵察機、水上機など機種別に、6ヶ月間の延長教程(実用機教程)の教育を受けました。操縦専修生たちは、筑波航空隊(戦闘機)、宇佐航空隊(艦爆)、百里原航空隊(艦攻)、豊橋航空隊(陸攻)、鹿島航空隊(水上機)など、全国各地に点在する練習航空隊で実用機を使用した訓練を受けた後、各部隊に配属され、一人前の搭乗員となって第一線へ飛び立っていきました。



谷田部海軍航空隊で、訓練開始前にエプロンに勢揃いしたゼロ戦。飛行機の垂直後尾「ヤ-170」の「ヤ」は「谷田部海軍航空隊」の識別記号。
(「特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ」HPより転載)

戦いの空へ

予科練出身者が初めて実戦に参加したのは、1937(昭和12)年7月7日に勃発した日中戦争でした。同年8月15日、海軍航空隊が長崎県の大村基地および台湾の台北基地から、38機の96式陸上攻撃機を発進させ、中国の南京、上海を爆撃したもので、これが予科練出身者(乙飛第1期〜第3期生)の初陣となりました。

昭和18年夏以降、終戦までに約22万余の予科練生が大量採用されましたが、戦況の悪化、航空機および燃料の不足等により、飛練教育が不可能になり「翼なき予科練」の時代になっていきました。この時期以降の予科練生は、航空機搭乗員を夢見ていたものの、主として人間魚雷「回天」・水上特攻艇「震洋」・人間機雷「伏竜」等の、航空機以外の特攻兵器の要員としての教育を受けることになりました。さらに1945(昭和20)年3月、一部の部隊を除いて予科練教育は凍結され、6月には各予科練航空隊は解散されました。一部の特攻要員(13期後期生は「回天」、14期一次生は「震洋」で出撃、もしくは待機中でした)を除く多くの予科練生は、本土決戦要員(兵器はなく、有るのは爆薬を抱えての体当たり、肉弾だけでした)として各部隊に転属となり、終戦を迎えました。(高21回 松井泰寿)

1941(昭和16)年12月8日、アジア太平洋戦争が勃発、真珠湾攻撃に参加した予科練出身搭乗員(乙飛第1期〜第9期と甲飛第1期〜第4期)は、全出撃搭乗員の約4割を占めていたように、戦前に予科練を卒業した練習生は、下士官として航空機搭乗員の中核となっていました。そのため戦死率も非常に高く、約8割が戦死しています。

1942(昭和17)年6月のミッドウェー海戦の敗北以後、戦局は一変、予科練出身者を含む熟練搭乗員の損失が増加し、次第に育成したばかりの若い予科練出身搭乗員等を第一線に送らざるを得なくなりました。1944(昭和19)年10月の比島沖海戦において、初めて特別攻撃隊が編成された時、その24名の特攻隊員全員が甲飛第10期生でした。その後、沖縄における菊水作戦、および本土防衛作戦でも、予科練出身者主に10期〜13期

飛行予科練習生の年度別入隊、戦死者数(海軍会資料)

昭和年	入隊者数	戦死者数	戦死者率(%)
5	79	49	62.0
6	128	65	50.8
7	157	105	66.9
8	150	96	64.0
9	200	109	54.5
10	187	125	66.8
11	204	168	82.4
12	469	348	74.2
13	954	760	80.0
14	1,297	1,005	77.5
15	2,073	1,601	77.2
16	6,456	4,648	72.0
17	8,872	4,662	52.5
18	44,138	4,157	9.4
19	151,471	1,070	0.7
20	25,034	130	0.5
合計	241,869	19,098	7.9

(注) この資料は、甲種、乙種、丙種、特(乙)種の全入隊者数である。教育場所は、特に昭和17年以降、従来の横須賀または土浦航空隊の一方から、次第に三浦、鹿島、志保、舞台、奈良、西宮、岡崎、豊後、熊本、徳島、宮城、小高士等に拡大しており、すべてを含む。

【参考資料】

『海軍航空隊ものがたり』阿見町
『蒼空の果てに』特攻隊員の記録

永末千里著